



平成19年度冬の学習会を開催！



2月11日（月）、今年は大阪市立中央青年センターを会場に、全国からたくさんの先生方にご参加いただき、平成19年度冬の学習会を開催しました。今年度の冬の学習会は日本教育オーディオロジー研究会の上級講座に協力し、公開講座と共催という形で実施しました。

講演は2本で、1本は筑波大学特別支援教育センターの庄司和史先生による「聴覚障害乳幼児の支援の課題について」、1本は筑波技術大学障害者高等教育支援センターの白澤麻弓先生による「高等教育機関に学ぶ聴覚障害者の現状とその支援」でした。

開会にあたり日本教育オーディオロジー研究会会長の大沼直紀先生のあいさつがありました。そのなかで、乳幼から成人サポートまでの幅広い講演内容に期待していること。また、近畿教育オーディオロジー研究協議会が設立され10年目を迎えること、教育オーディオロジーが果たしている役割と成果、日本の教育オーディオロジーがアジアでも期待されていることなどのお話を頂きました。



『聴覚障害乳幼児の支援の課題について』

講師：筑波大学特別支援教育センター

庄司 和史 先生

特別支援教育には、障害領域を超えた“同じもの”（共通の原理）と障害領域によって異なる“違うもの”（領域の専門性）の2つの側面があるのではないのでしょうか。上級講座の澤田先生



(元やまびこ園園長)の講義の最後に指導者としての「迫力」ということが話題になりましたが、この迫力…子どもを変えたいという根本の部分こそが、聴覚以外の支援が必要な子どもに積極的に関わっていく為の共通の原理であると強く思っています。

・・・私が乳幼児教育相談の現場にいて感じている課題には次のようなものがあります。①新生児聴覚スクリーニングで発見される子どもが増えている。②軽中等度難聴の相談が多くなってきている。③人工内耳の適用年齢が早まったことで人工内耳の相談が早くなってきている。④コミュニケーションモードについての相談が増えている。

新スクで発見された子どもは確定診断がほしい3. 4ヶ月、補聴器装用は6ヶ月くらいで、長期にわたる様々な支援が必要となります。教育の開始が半年以上早くなるので、新たなプログラムを作らなければなりません。0才代の補聴器評価は難しく、保護者からの具体的情報が得られにくいので、具体的な観点を提示したりする配慮が必要となります。

軽中等度難聴に関しては、音声言語だけで大丈夫ということはなく、必ず視覚的な手段も必要になります。発達に対しての十分な配慮や進路選択における支援が重要です。

人工内耳のことについては、医療機関との連携が不可欠です。将来を見通した障害理解を進めたり、常に新しい情報を収集し提供する支援が必要です。

コミュニケーション手段については、最近は手話と音声言語の併用があたりまえになって、どちらかだけということは少なくなっています。今後は、どのように一緒に使っていくのかを考えなければなりません。

・・・乳幼児期の親子関係で大事なことは、寄り添うこと(一緒に同じものを見る、同じことをする、感じる)です。言葉の発達に必要なことは、ママが大好きという気持ち、聴覚を含めたあらゆる感覚を活用する、たくさん話しかける、規則正しい生活のリズム、等です。子どもはその場でわかることを求めているので、周りの出来事を知らせ、ちゃんと受け止めてあげることが大切なのです。



会場からの声

- ・乳幼児の指導の配慮や基本的なことがよくわかった。
- ・超早期の指導の難しさを感じるとともに、やりがいも感じる
- ・何度聞いてもいろいろな気づきがあります。
- ・聴覚障害へのいろいろなサポートをうまく活用するシステムがあることを初めて知りました。

『高等教育機関に学ぶ聴覚障害者の現状とその支援』

講師：筑波技術大学 障害者高等教育支援センター

准教授 白澤 麻弓 先生

白澤先生の講演は大学での情報保障についてでした。

まず、ビデオを使った授業体験として、映像だけの講義、ノートテイクのある講義、PCノートテイクのある講義、IPトークでのノートテイクの講義の様子を見せて頂き、音声の無い状態で4種類の情報補償の違いがはっきりと分かりました。

講演の要旨は以下のとおりです

- ・ 全国に大学・短大併せて約1200校、そのうち約30%の大学に聴覚障害学生が在籍し、ここ3年以内に在籍していた大学を含めると約40%になる。新しく聴覚障害学生を受け入れる大学が10%程度有り、いろいろな大学に進学していると言うことが分かるが、聴覚障害学生の支援のノウハウが蓄積されにくいという現状でもある。聴覚障害学生がいる大学の状況は、46%の大学がノートテイクの支援を行なわれている。ただ、ノートテイクは最低限の情報補償なので、よりよい情報補償が出来るようにしていってほしい。
- ・ 支援体制では、障害学生委員会を設置している大学が88校、専任の担当者を置いているのが40校、支援室を設置しているのが30校ぐらいあるとのこと。支援に係る費用については、国立大学の運営交付金や私立大学経常費補助金などが出ていて、その中で、ノートテイクのボランティア等の費用を支出しているとのこと。
- ・ 情報補償を行う上で、情報補償者が情報補償の責任を負うのではなく、授業担当者が責任を負うシステムが必要であり、そのためノートテイクの内容を授業者が確認し、必要であれば追加情報を提供するようにしてもらっている。

先進的な取り組みをしている大学として、広島大学と群馬大学、アメリカのロチェスター工科大学を紹介されていました。広島大学は、一部の担当者に負担が集中しない組織を作り上手く機能しており、群馬大学は、プロの手話通訳士を2名配置し、質の高い情報保障をしているとのことでした。

講演を聞き、大学での情報保障はかなりのスピードで進んでいることが分かりましたが、その前段の高等学校での情報保障は、聾学校での情報補償はきちんと出来ているのか・・・と、考えさせられました。



来年度の予定



来年度の予定が1月の代表委員会で決定されました。
講演会・講習会とも例年通り実施する予定です。皆さんご参加ください。

第1回代表委員会

平成20年5月13日（火）大阪市立聾学校

第2回代表委員会

平成20年8月20日（水）大阪府立生野聾学校



第10回講演会・講習会

平成20年8月21日（木）大阪府立生野聾学校

8月22日（金）アウイーナ大阪

講師：大沼直紀先生（筑波技術大学学長）

秋の講演会

平成20年11月1日（土）大阪市内

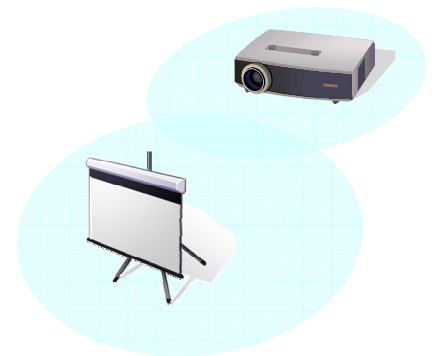
講師：濱田豊彦先生（東京学芸大学）

第3回代表委員会

平成21年1月23日（土）京都府立聾学校

冬の学習会

平成21年1月24日（日）京都市内



各地の研究会等の予定



6月21, 22日
10月 2, 3日
10月15～17日
10月 18日

補聴器勉強会（神戸）
聴覚医学会（東京）
全日聾研（広島）
日本教育オーディオロジー研究会講演会
会場：（財）広島市文化財団アステールプラザ



近畿教育オーディオロジー 研究協議会事務局

〒639-1122
奈良県大和郡山市丹後庄町456
奈良県立ろう学校内

事務局長 中井 弘征

TEL：0743-56-2921

FAX：0743-56-8833

メール：h-nakai@indigo.plala.or.jp